

団長の心のものさし

たかがハグ
されどハグ

6月のお誕生会が開かれる

6月最後の練習日、一年の半分を消化したこの日、6月生まれのメンバーを祝う、恒例のお誕生会が開かれた。マンネリ化を打破するため、委員によるハグサービスも三人に増強！三人の女性とハグ出来る、スペシャルバージョンアップだ。

.....

さて、6月に誕生日を迎えるメンバーは、テノールの本馬場淳一さん、ベースの町田直紀さんの2名。メンバー数がそれほど増えない状況の下、本馬場さんはこの3月に入団したニューフェイス。男声団員としては何と、ベースの町田さん以来の新人さんだ。

町田さんの入団がたしか1995年のことなので、実に新人として15年間君臨した町田さんと、その王座を奪い取った本馬場さんの、摩訶不思議なお誕生会となった。しかもその年齢差も15歳という、これまた不思議な関係である。男声メンバーは15年に一度新入団員が入る、といったジレンマが生まれるかも。なんと長いスパンだ。

新種のチェリーが???

このお誕生会では、手を変え品を変え、5月には鱈寿司まで登場した。今回は、テーブルを眺めるとアメリカンチェリーが置いてある。とその横に、何とも色鮮やかなチェリーが???しかも大量に...。実はこれ、ミニトマト。委員の一人、ももちゃんが用意してくれたものだから。何でも、チェリーは値段が高いからよく似た(?)ミニトマトで量を



6月生まれの本馬場淳一さんと町田直紀さん

ごまかしたとか。ユニークな発想だ。面白すぎる！マンネリ化を防止するアイデアが実



チェリーとミニトマト

に活かしている。こうした楽しみ方をもっともっと取り入れていってほしい。

.....

お誕生日委員会は、お誕生会を取り仕切るとはもちろん、さらにパワーアップして、うたおにの意識改革の先導を望みたい。



パワーアップしたハグサービス



うたおにの6月28日(月)の様子

練習内容
般若心経
Alleluia
O Danny Boy
Sanctus
YAI SAMANENA

きょうで6月も終り。ということは今年も半分が過ぎたということ。早いなあ...。本日は全員出席にあと一步。残念ながら一人欠席だった。でも快挙かな。一般の合唱団だから。太田君も参加してくれたしね。新しいメンバーは、僕が団長だということも知らなかった事実が判明。これぞ、うたおにだね(笑)。

武術以上に精神修練を積む

その昔、朝鮮半島が高句麗・新羅・百済の三韓に分裂していた時代、高句麗には早衣(チョイ)が、新羅には花郎(ファラン)、百済には太学舎という、軍隊とは別組織として、命がけで国を守る若者たちによる精鋭部隊があった。彼らは幼少期から厳しい修練を積んで、優れた武術を修得するのみならず、より優れた者は精神修行を続け悟りをも啓いた。

こうした若き戦士たちは、敵の攻撃前に先制攻撃を加え、相手側戦士の士気を抑える役目を果たしたり、味方が敵の攻勢に遭うと、命をも顧みず勇敢に敵に切り込んで行くのである。この勇姿を見た味方の大軍は士気を取り戻し、逆転攻勢に出るといった具合だ。

重要な点は、彼らが厳しい武術の修練を通じて、実は強い精神性を養っていることだ。事実、新羅の花郎が武術組織として活躍したのはごく限られた時代だけ、そのほとんどは宗教的組織集団として存在していたと見るのが歴史学の見解のようだ。余談だが、彼らが武術組織として称えられるようになったのは、なんと第二次世界大戦後らしい。

こうした古の若き勇者の活躍は、朝鮮の『三国史記』や中国の『三国志』に記載されている。ただし、史実としては疑問点が残る部分もある



三韓時代の朝鮮半島



新羅の花郎のトップ「大花郎(テファラン)」。

ことは付けたい。

さて、僕は決してなやっつけてなどと考えるでもない。き勇者を例たとえ一人でも、周囲えてしまうを肝に銘じからにほか“変える”では、当然、善い方向の今回強調し善い方向に

この『心を書き続けどうしても繰り返してアンサンブルは、影響をこの『心を書き続けどうしても繰り返してアンサンブルは、影響を

このことを突き詰めていくと、技術の修得は単純作業だ。時間をかければ出来ないことはないとも言える。出来ないのは怠けているからだとも言われかねない。しかし、精神的な修練には達観した悟りの境地に辿り

古の若き勇者に学ぶ

加えておき

はタカ派で誰かを台頭しようとしているわけこの古の若えたのは、の言動であつの人々を変ということでおきたい。という意味悪い方向、両面がある。たいのは、ついでだ。のものさし』ていると、同じことをしまうが、ルというの与え合うも

着かなければならないのだ。ここまで大きにしくとも、そのグループの一員として、一人立ちをして、機能していかなければならない。この機能するための修練が重要になる。それは技術修得であっても、または、一人の人間としての人格形成であっても構わない。

鍛えた抜いたものからは“風格”が表れる。真の勇者には“気品”すら漂う。強がったり、悪ぶったりするのは自信がなく不安だからだ。本物にならなければ、周囲に善い影響など与えられない。

現代の勇者、岡田ジャパン

先日、サッカーのW杯南アフリ大会で、岡田ジャパンはパラグアイに惜敗した。残念だ。ゲームは厳しい。結果がすべてだからだ。しかし、命を落としても士気を高めた古の若き勇者に通じるところを、今大会を通じて日本チームから感じた。

僕が幼い頃、サッカーは決してメジャーではなかった。子供たちを夢中にさせていたものは野球だった。だから今のプロ野球があり、その力は世界一と言われるほどだ。野球に比べサッカー人口は多く、世界中に広がっている。今回のW杯は、サッカーを通じて、多くの日本の子供たちに感動と共に夢と希望を与えたに違いない。10年、20年後の日本では、もっと優れた選手たちがサッカーを楽しみ、世界のサッカーをけん引してくれるだろう。それを考えると、自分が携わっているわけではないのに、なんとも心が晴々する。これが啓蒙の望むべき姿だ。

.....

私たちがたおにも、学校訪問を通じてたくさんの子供たちに感動を与えていきたい。こうして蒔いた種はいずれ実を結ぶのだ。この行為を実効性高くするために、私たちは修練しなければならない。こうした本物を目指す姿勢を貫かなければ、誰も応援、支援などしてはくれない。

合唱がメジャーになれないのは、携わる人々のある種の“真剣さ”が足りないように感じる。

うたおには大丈夫だと信じている。